

# 新渡戸稲造のみる日本人と英語

## 「明るい身のこなし」と「会話力」

照井悦幸

### 序

日本人の英語力については、今日の日本でも大きな関心事である。本稿では、その英語力を武器に国際連盟事務局次長の要職を務めた新渡戸稲造（1862-1933）の英文著書“The Use and Study of Foreign Languages in Japan (1929)”（富田清訳『日本における外国語の使用と研究』）、ならびに早稲田大学における連続講演をまとめて新渡戸の死後に刊行された『内観外望（1933）』のなかに収められている「英語及び英文学の価値」、「米国人の英語と文学」を中心に、この英語の達人がみた英語および英語に対する日本人との関わりについて考察してみたい。これら2つは今からすでに約80年前の日本人と英語に関する記述である。しかし、日本人の英語力をいかにして向上させるのか、なぜ会話ができないのかといった新渡戸の問いかけは、今日の我々とまったく変わらない問題に対するものである。

新渡戸の語学への言及は、言語学という専門領域における問題とは直結するものではない。国際連盟のなかの文化交流部門であった知的協力委員会の主要メンバーとして、あるいは東西文化の懸け橋を志したという新渡戸の本領として、彼の目的は文化や思想の交流を通じての国際間における相互理解の促進にあった。このことは、必然的にそれぞれの国民性に対する関心につながり、それがまた比較考察を通じて日本人の気質や考え方に対する多くの著作を生み出した。「日本人の魂」という副題のある『武士道』（1899）は、西洋との比較を通じて書かれた代表的な日本人論であり、ジュネーブ滞在時代に交流があった人々を書いた『偉人群像』（1931）もまた、各国著名人を通じて描いた国

民性の比較である。すなわち、ここで取上げようとする新渡戸の日本における英語や日本人の英語の習得に関する著作のねらいは、英語を巡るそれらの状況を通じて日本人の気質を考察する点にあったものである。

新渡戸は、日本人と外国語の受容を考察するなかで、日本人の「民族的言語不適性」を指摘する。新渡戸があげるその根拠として、日本人の「会話能力を引き出し、訓練する、明るい身のこなし」（全集⑩、p559）が欠如していることを指摘するのである。かつて、英語教育をめぐる「英語を話せるようになる」ことが目標なのか、「潜在的能力としての教養の英語」を目標にすべきなのかという論争（平泉・渡部、1975）があった。新渡戸は、まず日本人の「知的手段」としての英語を重要視する考え方が、「会話」を一段レベルの低いものだという信念を植え付け、これが会話の向上を妨げたと指摘する。そして、彼が問題にするのは、英語を「話せる」かどうかではなく、英語を「話そう」とするかどうかという態度なのである。それは、外国語という問題を越えた人との関係、コミュニケーションの持ち方の根本的な問題への問いかけだといえる。以下、会話能力を引き出す「明るい身のこなし」に焦点を当て考察してみたい。

### I. 外国語への伝統的な信念

#### 1. 「国際文化主義」（“A Study in Cultural Intenationalism”）と外国語

“The Use and Study of Foreign Languages in Japan”『日本における外国語の使用と研究』は、国際連盟の知的協力委員会から

“Intellectual Life in Various Countries”（「世界諸国の知的生活」）の双書への寄稿として書かれたものである。その副題には、“A Study in Cultural Internationalism”（「国際文化主義」）とある。本文中にとりわけ説明や定義がなされないが、国際文化主義とは、この委員会の精神を示したものだと思われる。大阪毎日・東京日日によって出版されたこの著作の日本語版『日本における外国語の使用—その効用と研究』に掲載された「編者の序文」（全集⑱、p491）によれば、知的協力委員会は、連盟総会の第2回会議に提案されて創設されたもので、世界諸民族の精神的な協力の援助を目的にしている。A.ベルクソン、A.アインシュタイン、M.キューリーなどを含めた12人の著名な学者たちが任命されている。新渡戸は連盟の事務局次長という立場にあって、この委員会の総括の役割を担っていた。

外国人読者を想定している“The Use and Study of Foreign Languages in Japan（『日本における外国語の使用と研究』）”（全集⑱）は、日本社会における外国語の受容と普及を文化的な背景をもとに記述されたものである。それは、いわば副題の「国際文化主義」の一例を、言語的な側面で示したものであると理解できる。緒言において新渡戸は以下のようにのべている。

…この論文が本来準備されたのは、言語研究のためではない。著者の関心は、国際間の思想および思考の交換交流の成長を観察し、そしてこれらが——望むらくは——国民的気質のよりよき理解を速め、きわまるところ国際心の普及を達成することなのである。（全集⑱、p494）

すなわち、他国の人々を理解し、国際心の普及を「思想および思考の交換交流の成長」、国家の枠を超えた「文化」のやり取りの中で具体化させようというねらいである。新渡戸は、通信手段の発達した今日、思想や慣習が相互に働き合うことは避けられないとし、「こういう相互の影響は、あらゆる国において——外来語の

使用においてとくに著しく——明白である。自由な制約されない思想の交換は、言葉の交換を意味するものである。」として、国際主義の立場で、外国語受容についての考察の意義を表明している。

## 2. 外国語への伝統的な信念

国際連盟の知的協力委員会から英文で刊行されたこの“The Use and Study of Foreign Languages in Japan”は、第一部「古代における中国語の伝来」で、日本における中国語の受容のありかたを紹介したあと、第二部において「近代における西洋語の研究と効用」として英語の受容と普及について記述されている。本稿では第二部を取り上げて、新渡戸のみる日本人と英語について考察してみたい。

この第二部では日本における英語需要の増加や、英語の学校教育における実情や教育法などを述べた後、「民族の言語的不適性」という節が続いている。このなかで冒頭、新渡戸は以下のように述べている。

生きた言語が、日本では、知的手段として主として、学問的研究の目的のために用いられているということは、いわば、実際的目的のためにその十分な価値を開発する妨げとなっている。…日本人の学者の間には、実用的のことに言語を使用することは、知的追求の低さを示すものだという残念な考えがある。どんな種類のおしゃべりも、なんの尊敬も受けないし、聞き馴れない言葉を話す才能は、むしろ疑いを持って見られる。（全集⑱、p556）

ここで問題にされているのは、日本人の英語を使つての実用的な「英会話」力の低さである。そして、その能力が向上しない第一理由として挙げるのが、外国語使用に対する考え方、価値観の問題である。新渡戸は英語を「知的手段」として用いられること、あるいはそう考えられていることが、実用英語の価値を認めず結果的に英会話力の向上を妨げていたと指摘するので

ある。新渡戸によれば、1897年以来、学校教科課程の中に英語を含まない学校はなかったが「しかし、この事実にもかかわらず、学生達がそれらの学校に集まったのは、英語会話を習うよりも、英語を読む知識を得るためであった。」(全集⑱、p537)すでに学校教育の中で英語は重要な位置を占めていたが、それは「特殊な学問を研究するため」という目的であったと述べている。

このような会話に重きをおかない日本人の英語学習に対する考え方は、新渡戸が描写するような以下の語学教師の典型から助長されていたともいえる。

…彼等は欧米の実際生活の知識はほとんど持っていない。彼らの眼は、外国の家庭や町を見たことがない。彼等教師の舌は(大多数の場合)“i”と“r”、“v”と“b”あるいは、“the”と“z”を上手に区別できない。——がしかし、それでも彼等は、驚くほど豊富な外国語の慣用句、外国の生活習慣、作法、文学、歴史、とりわけ思想の知識を持っている。(全集⑱、p550～p551)

すなわち、新渡戸の言葉を続けるが、日本人にとって「外国語の征服は知的なものであって、交際上のものではない。その最上の助けになるものは本で、最も劣悪な厄介者は会話である。」(全集⑱、p551)ということになる。

…彼等(教師)は会話が全くできないことを隠しだてしない。会話は彼らに期待されていない。実際、話すことができなければできないほど、それだけ多くの知識があるという漠然たる信念が存在するかのよう、会話の無知を誇る嘆かわしい傾向がある！(全集⑱、p551)

そして新渡戸はこの理由を、日本人の外国語に対する「伝統的な信念」によるものだと述べる。

…つまり、言語は知識伝達の手段であって、

話し言葉ではなく、ましてや発音のことではないという信念である。こうして外国語は眼の訓練であって、耳の訓練ではなく、ましてや言葉の訓練ではまったくないと考えられている。(全集⑱、p551)

英語教授における変則法の普及もまた、日本人の「英語に対する信念」に裏付けられているといえる。「その唯一の目的は文の意味をつかむことであるから」(全集⑱、p540)発音については留意しない。また逆説的に「…全文の考えを把むかぎり、私自身や他の人の耳にそれがどう響くかに、注意せねばならぬだろうか——私が演説をしたり、きいたりする予定がないのなら。」と記し、さらに多少皮肉的にも「無言で勉強するものにとっては、全く正当で十分なものである」(全集⑱、p540)とも述べている。

しかし一方で新渡戸は、「意味をとる」ことに重点をおき、日本における英語による知識、情報収集のもっとも初期の段階で、苦闘しながら試みられたこの方法に一定の評価も与えている。

近代日本の初期、すなわち前世紀(1800年代)の60年代、70年代においては、西洋語の研究が、最も熱心に求められても、日本には、まだわずかの外国人しか居住していなかった時で、変則法が唯一の方法であったことを記憶せねばならない。

(全集⑱、p541)

このような、英語を「知的手段」として会話など実用を軽視するのは、開国した日本が外国語の必要を認めた元来のものとはかけ離れていた。新渡戸は「日本における外国語の研究は、科学であれ、政治であれ、その実際的使用をすることであったことを記憶しよう。」(全集⑱、p534)と述べて、英語学習への要求の高まりが、まず日本がアメリカとの通商関係を開始したこと、そしてイギリスの政治的、商業的な勢力を感じたという、現実的な実用性を認めたことであったことを指摘する。

では、それにも関わらずなぜ、受動的な読む手段としてだけとして英語を捉えるようになったのか。直接的な答えはなされていないが、「知的手段」を偏重したことについては、以下のような記述がある。

科学研究は、日本においては、自立するほど十分にまだ発達していなかった。どの国も、科学分野では、完全に独立してはいないといって差し支えない。日本の場合、この依存はとくに強く感じ取られている。---どのような種類の研究——国語学や国史の研究さえも比較実証のための西洋の科学援助をもとめねばならない。

（全集⑱、p537～8）

結果的に日本において英語ということばは、一部の専門家だけの特殊言語になろうとしていたことになる。しかしながら、開国後から初期の西欧知識の大量輸入期が過ぎていくにしたがって、科学研究利用の英語としてもその使用が危ぶまれてくる。新渡戸は以下のように述べる。

高等程度の専門学校はすべて、入学には外国語の知識を必要とするが、それらの学校に入学した後は、参考書を読む以外は外国語を使用することはほとんどなく、商科大学のほかではほとんど会話の進歩はなされない。（全集⑱、p545）

新渡戸に知る由はないが、この結果が21世紀に入った今日まで延々と続き、日本にしか通用しない「受験英語」という特殊な語学風土を作り上げることになる。ところで新渡戸によれば、1877年から1885年の間は、すべての高等教育は英語、仏語、独語で行われ、日本人の教授でさえ、西洋語で講義していた。この時代はまさに新渡戸が札幌農学校で学び（1877、9～1881、7）、また東京帝国大学に在籍（1883）した時期と重なっている。この期間だけは例外的に、高等教育において知識の修得と英語の実用が一致した時期とでもいえる。

外国語に対する考え方、価値観に加えて、新渡戸は日本語という母語との比較から発音と聴解の困難についてもふれている。日本人の母語は「母音が豊富で、単語の発音はきわめて易しいので、他のどの言語も、日本人にとって発音しにくい。…外国語の会話を習得するには、耳が舌と同様に重要な役割を演じている、ところが日本人の音と調子の感覚は、比較的わずかしか発達していない。」また、「日本の音韻は、多数の外国語の音を無視する。…これらの音を発する時に運動させる筋肉をまったく使用しなかったことが、それらの筋肉を退化せしめたに違いない」（全集⑱、p559）と述べる。そして新渡戸は以下のように指摘している。

性、格、動詞の変化を伴った西洋語の全く異なった構造に加うるに、この発音の困難が日本の語学の無能さを増大させ、外国語上達をどんなに試みても、実際には失望感を与えている。（全集⑱、p559）

また、「『器官的』、『聴覚的』障害や困難は、日本人を当惑させ、西洋人と交際するにも間違いや無作法を犯すことを恐れるために、三重の力で日本人を悩ますのである。」（p560）と記している。

以上に述べてきたように新渡戸は、会話などの実際的な英語運用、あるいは実用的なことに言語を使用することは、知的追求の低さを示すものとみなし、外国語での会話における無知を返って誇るような価値感覚を指摘する。すなわち、日本人の低い語学力の第1理由を日本人の外国語学習に対する考え方、「伝統的な信念」に問題があると論じるのである。また、日本人の英語運用力の低さが、知的手段に偏った、会話などの実際運用の軽視に連なって、発音と聴解に関する訓練を妨げ、結果として日本人は外国語に対する失望感を深めていったということになる。そして失望感は、モチベーションの低下に直結し、学習の放棄あるいは外国語への嫌悪へと向かうのであろうか。

新渡戸が「伝統的な信念」とまで言い放った

日本人の外国語学習に対する態度は、今日に到るまでに一掃されているとは言い難い。いまだ日本においては、外国語が、一部の専門家や高等教養を持った者の関わりのなかの特殊言語としての響きを持つ。ことばは、人と人にあるのだという本来の価値を見失っている。旧態とした考え方や意識は、英語教育が一般化してもなお、画期的な変更はなされずに来たのであり、大多数の学習者には、「受験」のため以外には、その学習意義を提示させることが出来なくなっていたことが理解されるのである。

## II. 「明るい身のこなし」の欠如と会話力

### 1. 「(英) 会話」の根本的な問題

前節では、日本人の英会話力の向上が、日本における外国語への考え方あるいは信念によって妨げられているのだとする新渡戸のみかたを紹介してきた。これに加えてもうひとつ、日本人の英会話力について新渡戸が問題にしているものがある。それは、日本人の気質である。

新渡戸は「極東におけるどの民族も、日本人ほど言語の才能に恵まれない国民はいないだろう」(全集⑮、p559)と述べて、その理由を以下のように論じている。

それは沈黙をよしとする禁欲的な訓練のためであろうか。それは外国人をみな野蛮と考えた、他の世界からの長い鎖国から生まれた伝統のせいであろうか。それとも、地理的位置からくる精神的島国根性のせいであろうか。それとも封建時代から受け継いだ、一般の社会的無関心のせいによるのであろうか。これらの理由のどれもまたすべてが、外国語に対する日本人の嫌悪を説明することができるかもしれない。

日本人には、会話的能力を引き出し、訓練する、あの明るい身のこなしが欠けている。こうして、日本人には語学者の素質がないのである。(全集⑮、p559)

(ルビ点は筆者による)

「あの明るい身のこなし」とはどういう意味であろうか。外国語の習得について論じてきたなかで、唐突な感じを与えるこの表現は、この文脈にしか使用されずまた説明もない。しかし、ことばを学ぶ者(語学者)としての素質として、あるいは「会話的能力を引き出し、訓練する」ことが「明るい身のこなし」と関連付けられているのは興味深い指摘である。なぜなら、新渡戸は「会話力」を人の気質や態度の問題として捉えているからである。これは一般に「英会話」と呼ばれているものが、当然のこのようだが「英語」と「会話」という2つの要素から出来ていることをあらためて想起させる。そして新渡戸は、英語表現や英単語、適当な英文といった「英語」部分よりも、人との関係や状況の中でどう「会話」するか、どういう態度をとるかという部分を問題にしているのである。

これは、「英語が話せる」かどうかという、いわばテクニカルなことを問題にしているのではなく、率直に自分を解放して相手と「話そう」とするかどうか、相手の話を喜んで「聴こう」とするかという構えの問題である。そしてそれは、「会話」や「対話」においてより根本的な問題であったはずのものであろう。そしてこの視点から指摘する新渡戸の「会話力」の問題は、おのずと日本人としての考え方、態度、気質の問題に及んでいくのである。

### 2. 「明るい身のこなし(“debonair deportment”)

「会話的能力」は、原文では“conversational powers”(全集⑧、p464)、直訳すれば「会話力」となっており、「明るい身のこなし」は、“debonair deportment”、屈託のない、晴れやかな態度といった意味になる。新渡戸は「明るい身のこなし」の欠如は、上記で引用した「沈黙をよしとする禁欲的な訓練」など、地理、歴史や社会、文化などの4項目の根拠をもって、日本人一般の気質としている。そして日本人のこの「明るい身のこなし」の欠如こそ、新渡戸が「民族の言語的不適性」だと述べる根拠としている。

前記したように「明るい身のこなし」につい

ては、述べているのは上記の引用部以外にはない。しかし、国民の気質について強い関心を示す新渡戸は、日本人の気質について言及していることは多い。そのなかで、人との関係について具体的な心得を記述した新渡戸の著書『世渡りの道』（1923）で詳しく紹介される「ソーシャリティ」、そして「チェアフル」ということは、この「明るい身のこなし」に共通する意味合いを含んでいるといえる。

「チェアフル」が意味するところは、快活であること、微笑んでいるということである。これは、善意や慰め、思いやりの心に基盤を置く他者との交わりにおける態度である。このことはまた、「ソーシャリティ」＝「社交性」の意味も導く。新渡戸は以下のように述べる。

これは、人が社会に対する一の義務であると思ふ、野外を歩んでいると、苦々しい顔して、人を睨みつけるものがある。別に怖くは思わぬが、不愉快である。

（全集⑧、p30）

新渡戸によれば、旧制第一高等学校の学生など日本のエリートたちの気風は「東洋の豪傑流」であり、微笑んでいたたり、快活でいたりする態度は、八方美人のようであまり好まない。また新渡戸は、日本人のソーシャリティ（社交性）のなさを、「…面識のなき人に対しては「路傍の人の如し」などといはれてある通り、殆ど注意を閑却せられ、否な寧ろ敵意を以て対する如くである」（全集⑧、p30）と述べている。

どんな場面においても「会話」が成立するには、程度の差はあれ自己の内部を開示して、他者との接触がおきる。ソーシャリティの欠如はその機会を限定させ、チェアフルの乏しさは、その円滑で積極的な促進を妨げる。会話力を引き出す「明るい身のこなし」とは、これら2つに通じるものがあるといえる。「明るい身のこなし」同様に、「ソーシャリティ」、そして「チェアフル」は、日本人に欠如しているものだと指摘されるのである。このような新渡戸のみかたは、多くの場合そうであるように、西洋にお

ける振る舞いや考え方との比較によって論じられている。

### 3. 明るさ＝開放性：アメリカ人氣質

「外国語ほど、外国人嫌いの確実な解毒剤はない。」（全集⑥、p568）と表現して新渡戸は、外国語に親しむことは、その語を母国語とする者の精神、気質に親しむことだと指摘している。新渡戸は国際文化主義なかで、外国語研究のもっとも重要な影響は、知的なものへの影響のみならず、ものの見方、考え方は、その人間の気質へのものだと述べている。言語を通じてこそ思想や思考の交換交流がもっと明確に観察が可能だとし、それゆえに言語を通じて国民的気質のよりよき理解を促進したいということなのであった。

外国語との関わり方で浮き彫りにする日本人の気質は、新渡戸の体験に基づく西洋との対比でもある。早稲田大学における昭和3年（1928）以降約3年の間に行われた『内観外望（1933）』のなかに収められている「米国人の英語との文学」（全集⑥、p645）のなかで新渡戸は、アメリカ人の気質を「開放性」として論じている。

…亜米利加人の気質といふものは、先刻述べた通り、未開の地に鋤一本、鋤一つで入つたので、俺が俺がといふ自尊心が大いにある。その自尊心と共に、亜米利加人にいはせると、ネイバーフッド・フィーリングといふものがある。それは隣保の感情である。（全集⑥、p399）

広大な地を自力で切り開いていくという意識は、自尊心や個人の自立、個性を発達させた。アメリカ人の個人主義の源である。同時に、広大な地にあつて、到底ひとりでは何も出来ないことも知る。ネイバーフッド・フィーリングは遠慮ない交際が出来る関係を自己の周りに作り上げていく。新渡戸はこの個性の忌憚なき発展とネイバーフッドフィーリングをアメリカ人の「メンタル・トラデション」と呼んだ。（全集⑥、p404）

また新渡戸は、文学者エマーソンをアメリカ人の標本だとして、その「明るさ」について指摘する。

エマーソンの如き、英文学には明るいところがある。薄暗くない。人を疑つたり、拗ねたり、人にあてつけたり、蔭口をきいたりすることはない。すべて開放しである。気に食はなければ気に食はぬといふ。イエス、ノーが頗る判明してゐる。

(全集⑥、p402)

また思想や哲学においても、アメリカ人は額に八の字を寄せているような薄暗いものは、何事でも好まない。「中には薄暗い人もあるが、さういふ人は、深い思想家でも、世には受容られない。国民が好まない。何故か。それは自分の気分にあ合わない。」(全集⑥、p403) からだという。このような「明るさ」を好む国民性はまた、ネイバーフッドフィーリングから、「一度会へば、すぐお友達と思ふ。」(全集⑥、p403) と記している。このように、新渡戸が捉えるアメリカ人の気質は、自尊心、開放性、ネイバーフッドフィーリングという親和性、そして明るさである。これらは、日本人が欠如しているものとして新渡戸が指摘した「ソーシャリティ」、「チェアフル」、そして「明るい身のこなし」と、ほぼ対照をなしていることがわかる。

## 結 語

新渡戸の英語好きは、11歳で上京したときに、東北訛りの「ち」と「つ」や「し」と「す」の混乱が、英語の発音を教わってからその差異が明確にわかったという経験をして以来だという(全集⑥)。そのようなパーソナルな体験こそが、外国語学習のもっとも深いところで原動力になることに気づかされる。その後、札幌農学校、アメリカ留学を通じて、新渡戸の英語力は極まっていった。

“The Use and Study of Foreign Languages in Japan” (富田清訳『日本における外国語の使用と研究』) で論じられた、新渡戸の日本人と英

語の関わりについてのみかたは、専門的な視点からみれば経験的で、直感的な指摘であり、また当然のことにようにみられることも多いのではなかろうか。しかし、その経験的に当然と思われる事柄がどれほど現実に生かされてきたであろう。「専門センス」よりも「コモンセンス」の尊重を説く新渡戸の指摘は、開国して英語習得の必要が高まって以来、100年たっても変化しなかった日本人と英語のかかわり方にあらためて示唆を与える。

広く文化として生活習慣や価値観、気質などが論じられて、それがコミュニケーションのやり方に影響を及ぼすという考え方にたつて知られるようになった理論に、E. ホール(Hall,1981)の高・低文脈カルチャーという説がある。ホールは、雰囲気や状況に依存して、あまり言語化することを好まない文化とそのスタイルを高文脈カルチャーとよんだ。その文化領域のひとつが日本である。それは時に、雰囲気や状況を繊細に感じすぎて大らかな会話を拒む。また、D.C.バーランド(1975)は、コミュニケーションをする際の自己の開示、すなわちどこまで自分自身を解放して相手と接するかということについて、日米の比較研究を行っている。これによれば、あきらかにどのようなケースでも日本人はアメリカ人に比べて、自己開示が少ないという結果を出した。すなわち、多くの場合で自分を解放して率直な思いを人に語らないということである。これらは、新渡戸の表題「民族の言語的不適性」のような、民族に言語の不適性があるとはいわないが、英語で「話せる」あるいは「話せない」といった問題以前の他者に対する構えの問題といえる。日本人の「明るい身のこなしの欠如」という表現は、まさに日本人の「会話」に対するその根本的な問題を衝いているといえる。そしてこのことはまた、(英)会話力あるいはコミュニケーション力の問題として今日なお議論される問いであろう。

### 引用文献

- 新渡戸稲造 「内観外望」『新渡戸稲造全集六卷』教文館，1984年
- 新渡戸稲造 「日本における外国語の効用とその研究」『新渡戸稲造全集19卷』教文館，1984年
- 新渡戸稲造 「世渡りの道」『新渡戸稲造全集八卷』教文館，1998年
- 新渡戸稲造 “*The Use and Study of Foreign Language in Japan.(1929)*”『新渡戸稲造全集15卷』教文館，1985年

### 参考文献

- 平泉渉・渡部昇一 『英語教育大論争』、文芸春秋、1975年
- D.C. Barnlund *Public and Private Self in Japan and The United States.* Simul.1975
- Edward T.Hall *Contex and Meaning.* in Intercultural Communication, Larry Samovar ed.,Wadsworth Publishing Company, 1997